

6月は食育月間です



平成17年に施行された「食育基本法」に基づいて作成された「食育推進基本計画」、そしてその「食育推進基本計画」により定められたのが、毎年6月の食育月間、毎月19日の食育の日です。

「食」は誰にとっても切り離せないものです。食育月間の今月は「食」をキーワードに、本を紹介します。

『もの食う人びと』 辺見庸 著

3年生の国語教科書「読書案内」にも紹介されている『もの食う人びと』は1994年の講談社ノンフィクション賞受賞作。

1992年末から1994年春まで、著者はバングラデシュを皮切りに世界各地へ食の旅に赴いた。一年余りの旅で食べたものは、ダッカの残飯、バングラデシュの難民キャンプのピター、バンコクで作られる猫用缶詰、タイのソムタム、ピナトゥボ山のキャッサバ、フィリピンのジュゴンの歯の粉末、タイのスズメ、ドイツの囚人食、ドイツで食べたトルコ料理のドナー・ケバブとサチカオルマ、ポーランドのボグラッチ(スープ)、旧ユーゴ難民向け援助食料、アドリア海のイワシ、コソボの修道院の精進料理と聖なる水、ソマリアPKO各国軍部隊の携帯食、ソマリアのラクダの肉、乳とインジュラ(パン)、エチオピアの塩コーヒーとバター・コーヒー、ウガンダのエイズの村のマトケ、ロシア海軍の給食、チェルノブイリの放射能汚染食品、択捉島のラプーフ(フキ)、択捉島の留置場のカーシャ等々。人々は、何をどう食べているのか、どれほど食えないのか…。感動のルポルタージュとか、希代のノンフィクションなどと構えずに、「食」をテーマにした旅行記と肩の力を抜いて読んでみよう。読み応えたっぷりのおもしろさに出会えます。



『食べてはいけない!』 森枝卓士 著

インド人にとって、牛は食べ物ではない。アメリカ人やオーストラリア人には、鯨を食べるなんて、とんでもないこと。長野県の一部の人たちには好物のカイコやハチノコも、それ以外の地域の人々には食べるものとは思われない。

同じ人間であれば、食べられるはずのものを、「食べない!」というものがいっぱいある。それはなぜなのだろう? 「食べない!」ということから、「食べるって、どういうことなのか?」という疑問が湧いてくる。そして、その答えのヒントも出てくるのではないか。

食にまつわる世界のタブーを、写真家として多くの味に触れた著者が語る、空腹感いっぱいの一冊。



『世界の半分が飢えるのはなぜ?』 ジャン・ジグレール 著

人が消費するために生産された食料の概ね3分の1が世界中で失われ、捨てられており、その量は1年あたり約13億トンになる。

「ぼくたちの国では、お腹いっぱい食べて、太るばかりの人がたくさんいるのに、世界にはなぜ飢える人びとがいるの?」そんな息子カリムの素朴な疑問…ジグレール教授が人びとが飢えるほんとうの理由を、ひとつひとつ実例をあげてわかりやすく解説していきます。飢えは決して「運命」や「自然淘汰」ではない。国の政治腐敗、市場原理主義経済の支配、止むことのない戦争、そして自然環境の破壊…飢餓問題研究の第一人者が、飢えの撲滅を目指して次代に語る、必読の書。



『日本の食料』①～⑤巻 矢口芳生 監修

問題です。

Q1 航空会社のマイレージは増えると嬉しいですが、増えても嬉しくない「フード・マイレージ」とは何でしょう?

→答えは「①食生活の変化」の14ページに

Q2 500ml 清涼飲料水には平均何グラムの砂糖が入っているのでしょうか?

→答えは「①食生活の変化」の25ページに

Q3 スーパーマーケットなどで売られている食品には様々な表示があります。その一つにアレルギー物質となる特定原材料もあります。必ず表示される5つの特定原料とは、卵・乳・小麦・そばともう一つは何でしょう?

→答えは「③食の安全 安心」の40ページに

あなたがよく目にしているはずなのに、知っていそうで知らない人が多いのでは? 答えは図書館に来て本を開いてみましょう。

さて、みなさんは、グリーン・ツーリズムという言葉を知っていますか? グリーン・ツーリズムとは、農村などで、自然や文化、人々との交流を楽しむ旅行です。興味のある人は是非「⑤農山漁村を体験しよう」を読んでください。実際にどんなことをするのか、きっと見るだけでもワクワクしますよ。



食物の生産加工流通がどっぷりまるわかり!

『くわしくわかる! 食べものの市場・食料問題大事典』①～③巻 藤島廣二 他 監修

農業高校を舞台にしたマンガ『銀の匙』を読んだことがありますか。主人公は酪農科学科の高校一年生男子。生き物を相手にするのって、本当に大変! そして奥が深い…と思えるマンガです。わたしたちが普段食べている肉や卵、はじめからパックに入っているわけではありません。当たり前なことだけど、考えてみたことがありますか? 最近スーパーマーケットでよく見かるキーウィフルーツ。ニュージーランド産がほとんどですが、それだって遠い海の向こうで、誰かが種を蒔いて木を育て、実をとり、トラックや船などで運ばれてやっとスーパーマーケットに届きます。

こうした食べ物が、わたしたちの食卓に上るまでにいったい何人の人が関わっているのでしょうか。「くわしくわかる!」の題名通り、3冊読めばあなたの食生活への意識がきっと変わります。(ちなみに、『銀の匙』は豊明市図書館にあります。)



今月のおすすめ新着図書



『雨ふる本屋の雨ふらし』 日向 理恵子 著

昨年度、図書委員会作成の「らいぶらりい」で紹介された『雨ふる本屋』の続編です。

「雨あめ 降れふれ 〈雨ふる本屋〉!」ルウ子と妹のサラがひみつの呪文をとなえて訪れた〈雨ふる本屋〉に、重大な危機がせまります。本屋や図書館を破壊してまわる「ミスター・ヨングレ」の目的とは? ルウ子は〈雨ふる本屋〉を、そして妹のサラを救うことができるのでしょうか?

梅雨の季節に、心安らぐファンタジーで一息つきませんか。

